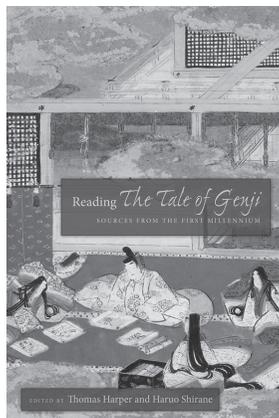


トーマス・ハーパー、ハルオ・シラネ編

『源氏物語』を読む——十世紀からの文献群』

Thomas Harper and Haruo Shirane, ed., *Reading The Tale of Genji: Sources from the First Millennium.*

荒木 浩



Columbia University Press, 2015.

二十年近く前、ニューヨークに客員研究員として短期滞在した。

週に二三度、大学院生と研究指導めいた雑談に興じる時間があったが、彼らはよく、冗談めかしてこういつた。「たとえば私たちが

『今昔物語集』（評者荒木の専門を当てはめている）を研究するとして、『今昔物語集』が成立する頃から、そう、昨日までが対象になりませう」と。訓詁注釈の根っこを引きずっていた当時はいささか面食らった。しかし今日では、古典のカノン化を軸として、受

容史の視点から作品を捉える研究は、国文学の分野でも、むしろおなじみの枠組みとなった。本書もまた、『源氏物語』成立前後の十世紀 (the First Millennium) から、中世、近世、近代を経て「昨日まで」、千年以上に渉る『源氏物語』の享受史を対象とする。この本の特徴は、その歴史を、創造的読解を重ねてきた現場の第一次

資料の重層によつて描き出すことである。新しい視点で綿密な文献選択を行い、その詳細を多彩な翻訳と丁寧な解説・文献解題によつて提示する。その結果本書は、ユニークな日本古典文学史として、また高度な古典文学リーダー（読本）としての相貌をも兼ね備えることになった。

編者は、オーストラリア国立大学やオランダのライデン大学で教鞭を執ったトーマス・ハーパー氏と、コロンビア大学のハルオ・シラネ氏。いずれも英語圏における『源氏物語』の代表的研究者である。とりわけ解説・解題執筆と翻訳において全体の四分の三以上の内容を担当し、文字通り本書の成り立ちを担うハーパー氏は、本居宣長など、十八世紀を中心とする『源氏物語』研究に関する歴史的考察を起点として、多くの業績を積み重ねてきた日本

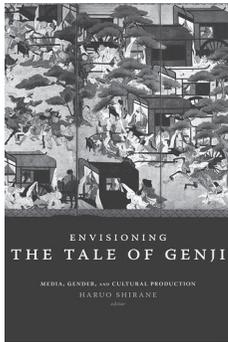
文学者で、谷崎潤一郎のエッセイ『陰翳礼讃』他)の翻訳者でもある。本書は、氏の研究の集大成としても位置づけられる仕事であろう。ちなみに冒頭に記した評者の想い出は、一九九九年の秋、シラネ氏にカウンターパートになつていただき、コロンビア大学に滞在した折のことであるが、偶然、キーンセンターでハーパー氏の講演を拝聴するチャンスがあつた。忠臣蔵をめぐる文化論だつたと記憶する。

*

開巻は、シラネ氏による序論(Introduction)で、この本の意図と内容を適確な解釈のもとに照らし出す。読者は、これをまずは味読して、本書全体のイメージマップを頭に入れておきたい。その言葉を借りれば本書は、「千年以上におよぶ『源氏物語』受容における文献的な道しるべを、英語圏の読者に、はじめでもたらした書物である。現存する数千の中から選び出されたこれら引用テキスト群は、『源氏物語』がいかに読まれ、解釈されたか、ということのみなならず、幅広い読者層に対して『源氏物語』という作品の意義を変更させてしまう、絶え間なく変化する文化的コンテクストについても教えてくれる^②」。その理解を十全に助けるべく、「それぞれの翻訳には、そのセクシオンを理解するための歴史的構図を提供するイントロダクションが前置されている」。これは、各章

のテーマと解説、個別文献ごとの解題と翻訳が、フォントを変えて繰り広げられる、本書の基本スキームである。

さてシラネ氏は、本書の全八章を簡潔かつ適切に紹介した上で、段を分かち、新たな視点で議論を展開する。「詩(和歌)そして虚構をめぐる問題」(Poetry and Issues of Fiction)、「ジェンダーと享受」(Gender and Reception)、「『源氏物語』の異本・変奏化と外伝・擬作の発生」(Tale of Genji Variations and Apocrypha)と論述を進め、「結びつけられた韻文、能劇、そして源氏絵」(Linked Verse, No Drama, and Painting)という段に至る。シラネ氏はここで、中世後期の戦乱の時代における武士にとつての『源氏物語』という視点から、連歌と能に着目し、二条良基の連歌論から、この時代に『源氏物語』が、新たな文化的起爆剤になつた様相を描き出す。そして武士が貴族に対して抱かざるを得なかつた文化的劣等意識と欠落への希求によつて、中世から近世にかけて、多様な享受メディアが出現することに言及し、本書に描ききれなかつた源氏文化の輪郭を次のように補足的に説明している。「紙幅・論述スペースをさまざまに熟考した結果、『源氏物語』を本説にした能劇や源氏絵については、本書に載せることが出来なかつた。しかし『源氏物語』文化史に関心を持つ人ならだれでも、『源氏物語』享受における、この二大潮流に関心を抱くに違いない。じじつ源氏絵という現象は、江戸時代になると、浮世絵や、その他新しいジャンルの形態とし



『源氏物語を描く』

て拡がり展開していったのである」と。こうして中世以降の『源氏』受容史の全体像が示され、本書の輪郭を拡げる。

続けてシラネ序論は、「江戸の研究、皇統侵犯、そして女性教育」(Edo Treatises, Imperial Transgression, and Women's Education) と論を進め、江戸時代の享受と『源氏』に描かれた倫理相克の問題について、時代の中での揺れ動きをたどる。そして宣長の「もののはれ」論までの展開を俯瞰して、最後の段「近代の受容と近代小説」(Modern Reception and the Modern Novel)へと接続する。『源氏物語』受容における、近代化による西洋の文学観 (literature) との接触、坪内逍遙『小説神髓』など小説観 (novel) の形成との関連、日本の「国文学」の形成、国民文学論、そして第一次世界大戦後の「世界(的)文学」(world literature)としての認識を論じる。そしてさらに近代作家の創作源 (inspiration) となった『源氏』の新しい意義について、昭和以降の作家、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫などへの影響に触れ、「谷崎が戦後に発表した短編『夢の

浮橋』が示唆するように」、「『源氏物語』には、若き男性が亡き母のイメージを追い求めたり、許されざる、あるいは成就し得ない愛の結果としてもたらされる死を描いたり、度を過ぎた自意識の結果として結ばれることのできない男と女の実在などという、多くのテーマやプロットの型を含み伝えた原型的作品であることを指摘し、「それ故に『源氏物語』は、現代の日本の作家たち、劇作家たち、そして映画の作り手たちに、訴え続ける作品なのである」と結んでいる。より深い関心を抱く読者には、シラネ氏が編纂した論集『源氏物語を描く——メディア・ジェンダー・文化的生産物』(Envisioning The Tale of Genji: Media, Gender, and Cultural Production, Columbia University Press, 2008.)の序論と諸論考との併読を勧めたい。

*

かくして本書は、〈千年以上の『源氏物語』受容における文献的な道しるべとして〉、〈現存する数千の中から選び出された多彩な引用テキスト〉の巨大かつレアな集合体であるとともに、解説・解題による位置づけを施した、労作の翻訳集である。それぞれ稠密な注が施されており、文献の測定とアクセスの「道しるべ」も十全になされている。本来はその内実を英訳論としてきちんと議論すべきところであるが、私にはその力がない。だが急ぐ必要はない。今後精細な検証が国内外で絶え間なく繰り返されることに

なるだろう。ここではそのささやかな手引きとして、各章の内容を概観し、引用・解析された文献を紹介しておきたい。

第一章は、「フイクション（そらごと）」についての初期の議論「(Early Discussions of Fiction)」と題して解説と概観がなされ、道綱母『蜻蛉日記』（九七四頃）³、選子『大齋院前の御集』（九八三頃）、源為憲『三宝絵』（九八四）、清少納言『枕草子』（九九七）、『源氏物語』絵合巻と螢巻、『紫式部日記』（一〇一〇）、菅原孝標女『更級日記』（一〇五九頃）の各節が掲載され、懇切な解題と翻訳が示される。重要なポイントは、「物語」という用語と、ヨーロッパでの「romance」[tale]「novel」などとの概念比較であり、『源氏物語』の場合は、「tale」が訳語として選ばれた理由の所在を記す。本章のテクスト群を眺めていると、まさに「わづかに『うつほ』『竹取』『住吉』などばかりを、物語とて見けむ心地に、さばかりに作り出でけむ、凡夫のしわざとも覚えぬことなり」と鎌倉時代初期の『無名草子』が評したごとく、同時代の中で『源氏物語』という突出的天才的な達成がなされたことをあらためて感得する。

第二章は、『源氏物語』に関するおしやべり、言及、噂、というとりわけ女性による『源氏』論争（女言おんなごころ）に着目し、それを「源氏ゴシップ」と名付けて論じる（Genji Gossip (Plus a Bit of Good Advice)）。独特の視点であるが、しかるべき批評理論に根ざした名付けである。本章の始めに、批評（criticism）とは、人々が芸術作

品に接して昂揚した時、その興奮を他の人々と分かち合いたいと思つた時に、実際に発生する、もしくはそうあるべき行為である、という趣旨のゲイブリエル・ジョシボヴィツチの言を引く。『源氏』について、あの人とおしやべりたい——ゴシップをめぐるおしやべりへの渴望は、批評の元始的かつ本源的営為なのである。この章に引かれたテクストは、『源氏物語』についてなされたごく初期の議論であり、それは言葉通り「会話としての批評」に類するものであるとハーバー氏は述べ、興味深い批評史始発の一コマを描き出そうとする。「場の物語」である『無名草子』の関連諸段に続き、とても珍しい文献群の翻訳が並ぶ。「The Lists」として掲載される四つのテクストは、たとえば男は薫、女は紫の上、見目かたちなら藤壺などというふうには、『枕草子』の類聚的章段のごとく、物尽くし、あるいは名寄せの形で批評をしていく短編『源氏四十八ものたとへのこと』、『源氏解』、『源氏ものたとへ』そして佚名資料（いづめいUnited || 鈴木家本『源氏人々心くらべ』⁴後半）である。また、「The Matches」（あはせ）というカテゴリーで、『源氏人々心くらべ』（阿波国文庫本）、『源氏物あらそひ』、『源氏人々心くらべ』（鈴木家本）、『伊勢源氏十二番女合』などが紹介される。この二つの分類は、とりわけ相互に重なるの多いものである。

これらやや特異なテクスト群がここに並べられることについては、かつて重松信弘氏が『新攷源氏物語研究史』で論じた粹取り

が参考になつてゐる。⁶⁾ 重松氏は、同書第二章第一節で「文芸的評論では、初期に歌論で源氏の情趣が考究せられ、無名草子で体系的な鑑賞的評論がなされた。これにつづいて、恐らくは中期と思はれる頃、源氏人々の心くらべ、伊勢源氏十二番女合・源氏四十八物たとへのこと・源氏解等の一類が出て、活潑な鑑賞的評論がなされた。これらの評論は、主として源氏中の人物や事件が表はす種々の情趣・心情などに注目したもので、平安時代的情趣に対する豊かな鑑賞をしてゐる。そして更級日記のやうに、没入してしまふのでなく、知性的な省察の態度があつた」と概観する。また第二章・第五節「初期中期の文芸的評論」において、「ほぼ同じ味はひ方をしてゐる」小品として、『源氏人々の心くらべ』以下を確認する。重松氏によれば、『源氏人々の心くらべ』は「源氏中の人々の心持ちを類同によつて対立比較し、その深鮮の度を考へて、勝負をきめたもの」。『伊勢源氏十二番女合』は、物語から「各十二人の女を選んで対立させ」「優劣を競」うもの。『源氏四十八ものたとへること』については、いくつかの「項目を立て、源氏の中からそれに適切な事がらを記」すものだと解析される。そしてそれらは「もとより記す所は甚だ断片的」ながら「著者が相応に豊かな文芸鑑賞の心情で源氏に対してゐる事が知られる」テクスト群であり、また「対偶の形式で情趣・心情等を比較玩味」するこれらの形式は、「当時の歌合の流行に影響せられて生じたも

のであらう」こと、さらにそれは「鑑賞が単なる断片のまま放置されないで、何等かの意味で、これに知性的な考察が、加へられてゐるとするならば、学問的な評論がここに発生したものと、見なすことができ、「歌論にみえた源氏評論意識の知性的な態度と「……」通ずるもの」を見出すと、重松氏は先駆的な見通しを示していた。

さて第一章と第二章のここまで、担当はすべてハーパー氏だが、最後に阿仏尼『乳母のふみ』が掲出され、クリスティーナ・ラフィン氏が、専門的見地から、新しい視界からの解説と翻訳を提示している。

第三章は、「カノン化へ」(Toward Canonization)と題して、定家の父藤原俊成を起点とする流れが取り上げられる。俊成撰『千載集』(一一八八)、「源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり」というエピソード・キングな俊成の判詞が載る『六百番歌合』(一一九三)、『正治二年俊成卿和字奏状』(一二〇〇)、『紫明抄』(一二九四)、『順徳院御記』(一二二〇)、『明月記』(一二二五)、『後鳥羽院御口伝』(一二二五―一二二七)、『京極中納言相語』(一二二九頃)が載せられ(ここまで担当はハーパー氏)、『賦光源氏物語詩』(一二九〇―一二九一)の漢詩文はヴィーブケ・デーネーケ氏が担当)までが年代紀的に掲げられる。

第四章は、「源氏供養」(Obsequies for Genji)。狂言綺語観と『源

氏物語』の中世の受容の関係を考える上で重要なこの概念と儀礼とが詳細に説明される。本章は、その源流的作品の一つである『今鏡』（一一七〇頃）への丁寧な言及（解題と「作り物語のゆくへ」の章の翻訳。ここまではハーパー氏担当）に始まり、『権中納言実材卿母集』（ゲイ・ローリー氏担当）、『藤原隆信朝臣集』（藤原隆信は一二四一生〜二〇五）、『新勅撰和歌集』所収の藤原宗家（二一八九没、妻は俊成の娘）の和歌（ここまではハーパー氏担当）、澄憲『源氏一品経』（二一六六頃、唱導文献に詳しいマイケル・ジャメンツ氏が担当）、『源氏供養草子』（ハーパー氏担当）と続く。

第五章は『源氏物語』外伝（The Tale of Genji Apocrypha）と題し、現存の『源氏物語』には収録されていない、古逸の巻や擬作の類いが取り上げられる。まずハーパー氏が専門とする本居宣長の『手枕』が訳され、続いて古逸『桜人』佚文が取り上げられる。続いて本編では、光源氏の死を象徴する空白の巻「雲隠」をもとに近世期に外伝として描き出した『雲隠六帖』が紹介される。『源氏』受容と注釈の歴史をも踏まえた解説の後、翻訳がなされるが、早稲田大学所蔵本による挿絵も挿入され、もう一つの『源氏』世界をビジュアルに見せてくれる。そして『巢守』巻佚文、『山路の露』と掲げられる。『桜人』や『巢守』のように古伝の巻と、『手枕』などの明確な擬作とがあえてシャッフルして提示されることにも注意しておきたい。本章はすべてハーパー氏担当である。

第六章は「中世の注釈」(Medieval Commentary)。ハーパー氏の解説は、注釈の発生から中世の終わりまで、そして近世へと続く研究史を概観し、その歴史と展開、そして個別の注釈書について詳述する。中国の経書や漢籍でなく、仏教経典でもない、世俗和文の匿名の物語が、なぜこれほど多彩な注釈史を形成するのか。それこそが『源氏物語』の価値であり、秘密である。その不思議を裡面から説明する、複雑で膨大な『源氏物語』注釈史の生成について、本章は十数ページに圧縮して、適確な英文の解説を行う。前史として俊成の「源氏見ざる歌詠みは……」の劃期から本文校訂の揺籃、『源氏積』（藤原伊行）に始まる現存注釈書の歴史・関連と方法を、文献学的に、時には異本も参照しつつ、筈木巻の解釈を例として、翻訳を交えながら、通釈して俯瞰する。『奥入』（藤原定家）、河内本の校訂と連動する初めての本格的注釈書『水源抄』（散逸）、素寂『紫明抄』、源具頭『弘安源氏論議』、行阿『原中最秘抄』、四辻善成『河海抄』と、「古注」と称される注釈群をたどっていく。そうして筈木巻冒頭「光源氏名のみことごとしう……」を例に、『河海抄』以下の注釈書の相互関係と、特徴・差異が示される。具体的に取り上げられるのは『花鳥余情』（一条兼良）、『弄花抄』（三条西実隆）、『細流抄』（実隆の子・公条）、『孟津抄』（実隆の孫・九条植通）、『岷江入楚』（中院通勝）である。

その上で、ハーパー氏は、三つの注釈を翻訳対象として取り上

げ、掲載する。一つは、連歌師宗祇の『雨夜談抄』（二四八五頃）。「草子地」という、独特のナラトロジー用語の命名者である。解題と翻訳はルイス・クック氏。同書はまさしく簿木巻、とりわけ雨夜の品定めに関する注釈で、本章の解説が、なぜ簿木巻を例示していたのが腑に落ちる。もう一つは、この時期には希有な、女性による注釈を残した慶福院花屋玉栄かおくまへいの著作である。その注釈である『花屋抄』（二五九四）と『玉栄集』（二六〇二）が提示される。解題と翻訳は、玉英の人物と学問そしてその時代相について多くの蓄積を有する、ゲイ・ローリー氏が担当する。最後は北村季吟『湖月抄』（『源氏』本文はアーサー・ウェイリー訳、注釈部分はハーパー氏）。中世からの合流点であり、また近世から近代に至るまで『源氏物語』注釈のスタンダードであった『湖月抄』について、ハーパー氏による懇切な解題が付される。

第七章は「江戸時代の研究」(Edo-Period Treatise)。『源氏』研究史では、「古注」を経て『花鳥余情』から『湖月抄』までを「旧注」と呼び慣らわす。それ以降が本章で取り上げられる「新注」である。その到達点として、残念ながら未完に終わった萩原広道『源氏物語評釈』が論じられ、江戸期の「新注」の歴史と内実が掘り起こされる。ハーパー氏が章の解説を書いている。個別に取り上げられるのは、熊沢蕃山『源氏外伝』（一六七三頃、ジェイムズ・マクマレン氏担当）、安藤為章『紫家七論』（二七〇三、内藤諭子氏担

当、そしてハーパー氏の原点である、本居宣長『源氏物語玉の小櫛』（二七九九）の解説・翻訳があり、松平定信『花月草紙』（二八一八）もハーパー氏が担当する。そして萩原広道『源氏物語評釈』（二八五四―一八六四、パトリック・カドー氏担当）の引用・翻訳で閉じられる。

最終の第八章は、「近代の受容」(Modern Reception)である。専門の鈴木登美氏が、十九世紀末から二十世紀にかけての世界状況を俯瞰的に捉え、解説を施す。日本の近代化の中で、イギリスに滞在した末松謙澄が『源氏』を英訳し、また日本では、坪内逍遙が『小説神髓』を著し、西洋から新しく移入された「novel」の訳語として小説概念を把握する。そうした時空において、フィクションや物語が新たな装いの中で投影され表象されていく状況などの詳細を、グローバルな視点で (from a global perspective) で論じている。英文学史などを模倣しつつ始まった日本の文学史叙述とともに、「国民文学」論と「世界(的)文学」観とが交錯して『源氏物語』に新たな意味付けがもたらされること。二十世紀前半になり、アーサー・ウェイリーによる英訳が出来して、ヴァージニア・ウルフの共鳴を得、海外の『源氏物語』が日本へ環流する時代が始まろうとすること。哲学者和辻哲郎も『源氏物語』や『枕草子』など平安文学を論じ、正宗白鳥も古典論を発表する時代が訪れること、などなど。

白鳥の実弟正宗敦夫は、日本古典全集という巨大な古典叢書を企画した。夫寛（鉄幹）とともに企画に協力した与謝野晶子は、『源氏物語』の翻訳にも取り組む。そして戦前のある時期に、谷崎潤一郎もまた、経済的事情も相俟って、出版社の懇意を受け、『源氏』翻訳に着手する。翻訳は、戦後にいたって改訳を繰り返して、谷崎源氏という独自の世界を生み出し、『細雪』などの創作へとつながっていく。

鈴木氏の解説は、一九七〇年代までに『源氏物語』受容の多様化と大衆化が進み、映画・漫画・アニメなど、新しいメディアの中で再生する様子にまで及ぶ。さらにそれと併行して、一九七六年のエドワード・サイデンステッカー、そして二〇〇一年のロイヤル・タイラーによる新しい英訳の出来によって、『Genji II』『源氏』が、英語のアンソロジーの中に、世界文学の一つとして違和感なく収まっている国際的現況に言及して閉じる。本書の未来にとっても象徴的な言説である。

個別の解題と翻訳は、まず最も名高い日本古典小説という触れ込みで『源氏物語』が海外へと紹介されることになった末松謙澄の英訳に付された序文 (Introduction to Genji Monogatari: The Most Celebrated of the Classical Japanese Romances) (一八八二) が取り上げられる。解説は、村上春樹の翻訳でも知られるマイケル・エメリック氏。続いて坪内逍遙『小説神髓』(一八八五―一八八六、パトリック

ク・カドー氏)、佐々醒雪による『新釈源氏物語』序文(一九一一)、与謝野晶子とその訳文『新訳源氏物語』を終えて付した「新訳源氏物語の後に」(一九一三、本書には、きれいな挿絵も転載される)、与謝野晶子が最終版として完成した『新新訳源氏物語』の後書き(一九三九、以上はゲイ・ローリー氏担当)と続く。

そしてイギリスのヴァージニア・ウルフが、アーサー・ウェイリーの翻訳(一九二五―一九三三)出版によって『源氏』を読む契機を得て感激して綴ったエッセイ「源氏物語——アーサー・ウェイリー訳紫式部作のある偉大な日本の小説の第一巻」(The Tale of Genji: The First Volume of Mr. Arthur Waley's Translation of a Great Japanese Novel by the Lady Murasaki) (一九二五) が、由尾瞳氏の解説を付して掲載される。最後は日本に戻って、正宗白鳥「古典を読んで」(一九二六、マイケル・エメリック氏)、谷崎潤一郎「源氏物語の現代語訳について」(一九三八、解説ゲイ・ローリー氏、翻訳トーマス・ハーバー氏)で本書は閉じられる。なお巻末には一部既出の転載についての注記 (permissions)、そして索引が付されて読解を助ける。

*

本書各編には、詳細な注が付いており、引用・翻訳文献の位置づけと、研究論文など、関連するビブリオグラフィーを的確に示す。挙げられた英訳と原文とを対比しつつ読み解けば、本書はそ

のまま国文学の『源氏物語』資料集ともなる。特に、国文学の側でも、原文しか知られていない多くの文献資料については、本書の英訳こそが初出注釈文献である。翻訳の宿命として、本文批判はむろんのこと、読みも解釈も、曖昧の残存は許されない。正誤やズレを認識しつつ、明快な結論を示さざるをえないものだ。妙な喩えを許されれば、あたかも日本語・日本文化の解明に、キリシタン文献のメタ言説と表記とが大きな貢献を果たしたように、本書のような高い水準の英文学術書が、あるいはこのような形態の出版が、国文学研究に新たな光をともしことも期待されるのである。

ところで本書の劈頭^{へきとう}には、伊井春樹氏（大阪大学名誉教授、逸翁美術館館長）にむけて、深い尊敬を込めた献呈の謝辞（Dedication）が記されている。確かに本書は、伊井春樹氏が積み重ねた『源氏物語』の注釈史・受容史研究を広く受け止め、英書として具現した書物であるが、この謝辞はもちろん、そうした一般論に留まるものではない。オーラルヒストリーを横に置き、文献で遡及可能な限りを述べれば、この三者をつなぐ結節は、一九八二年にあるようだ。シラネ氏とハーパー氏はミシガン大学の同窓でもあり、多くの接点を有するが、シラネ氏と伊井氏の確実な接点は、インディアナ大学で五日間に涉つて開かれた、初の本格的国際源氏物語学会（一九八二年八月十七〜二十一日）である。伊井氏（当時は国

文学研究資料館）とシラネ氏（当時は南カリフォルニア大学）はともに参加し、それぞれ発表を行っている。インディアナ学会の伝説的なインパクトは、私もいくどか耳にしたことがある。一方でその数ヶ月前、一九八二年三月一日から四月三十日まで、伊井氏は、オーストラリア国立大学に滞在して「日本文学の教育」（国文学研究資料館『十年の歩み』一九八二年十月掲載）にあたっている。ゲイ・ローリー氏は当時の学部生である（八四年卒業）。

しかしそれも遠い昔となった。周知のようにシラネ氏は、その後母校のコロンビア大学に赴任し、めざましい研究活動を行うとともに、あまたの古典学徒を育成し、国際的に学界を活性化させている。ハーパー氏はオランダに移つてその研究を熟成させ、それは本書へも結実する。一方、その後オーストラリア国立大学には、ロイヤル・タイラー氏が赴任し、先に触れたように、今日もつとも信頼すべき『源氏物語』の英訳を完成した。二〇〇一年の刊行である。その作業の基盤には、手前味噌だが、国際日本文化研究センター（日文研）の研究支援も寄与している。タイラー氏は、一九九七年一月から九八年にかけての一年間、日文研の外国人研究員として「源氏物語」の英語完訳」というテーマのもと、研究に邁進^{まゐしん}され、その経験が大著の翻訳出版へと結びつくからである。

その後、しかるべき年限を経て、タイラー氏もオーストラリア

国立大学を離れた。私が伊井春樹氏の企画により、タイラー氏とシンポジウムをご一緒することとなつて、氏に初めてお会いしたのは、既にその退任後であつた（二〇〇七年三月、大阪国際会議場）。さらに残念なことに、オーストラリアの大学の事情により、中国研究が活況を呈するのと相俟つてスクラップアンドビルドも進み、現在、日本の古典文学を教える講座は、オーストラリア中で皆無であるという。本書の書評を書いたバンディ氏（注1参照）も、ラ・トロブ大学からロンドン大学へと転任し、時日を重ねる。やむをえないことではあれ、少し寂しい現実だ。本書を手元に繰りながら、オーストラリアの古典研究がかつて豊かに育んだ『源氏物語』読解のうるわしい残り香を、私たちは、ひそかに慕つてみるのもよいだろう。

注

- (1) この分量計算は、本書への書評としてすでに刊行された、ラジャシュリー・パンディ (Rajashree Pandey) 氏による書評 (Japan Forum, 29, 2017) に依拠する。なお同書評は、英語圏読者の視点から、簡潔に本書の全容を分析して位置づけ解説しており、裨益ひえきされるところが多い。
- (2) これ以下本稿で示される翻訳は、評者荒木によるが、論述の都合上、適宜要約や意識を交える結果となつた場合もある。必ず本書原文との対照を乞う。
- (3) 以下カッコで示した成立年代は、あくまで論述の参照上、本書に示さ

れた数字を踏襲したものである。

- (4) この術語は、森正人『場の物語論』(若草書房、二〇一三) に拠る。
- (5) 森川昭「源氏人々心くらべ」(『成蹊国文』七、一九七四年) に紹介・翻刻される。伊豆の鈴木家(当時の当主は「鈴木勉氏」)調査の報告である。
- (6) ハーパー氏も文献注で重松著に言及する。重松氏は、本書が謝辞を捧げる伊井春樹氏(なお後述する)にとつて恩師の一人である。ここでの引用は重松信弘『源氏物語研究叢書2 増補 新攷源氏物語研究史』(風間書房、一九六二)による。
- (7) この学会の詳細については、小西甚一「インディアナ大学の源氏物語学会」(『国文学』二七―一五、一九八二年十一月) 参照。
- (8) 当時のオーストラリア国立大学の状況については、リース・ダグラス・モートン「オーストラリアにおける日本研究(人文科学について) 1980年〜1994年―予備ノート」(『日本研究・京都会議 1994』第1巻、国際日本文化研究センター/国際交流基金、一九九六年三月) 参照。